

聴覚障害の親をもつ健聴児（Children of Deaf Adults：CODA） の通訳役割の実態と関連する要因の検討

中津真美¹⁾，廣田栄子²⁾

¹⁾東京大学バリアフリー支援室

²⁾筑波大学

要旨：聴覚障害者の親をもつ健聴児（CODA）104例を対象に，親への通訳役割の実態と課題について後方視的に調査を行い，関連する要因を検討した。その結果，CODAは幼児期（平均6.48歳）から親の通訳役割を担い，通訳は生活の多岐にわたり，併せて親の代理交渉を伴うなど，成長期に心理的負担となっていた。聴覚障害の親との会話では，手話法が92例（88.5%），聴覚口話法が74例（71.2%）であり，一方で身振りや筆談等が併用され，会話が十分に成立する例は半数と少なく，会話に課題が示された。重回帰分析により通訳頻度には，両親が聴覚障害者，通訳開始年齢が低いという変数が関与し，親子の会話には，両親が聴覚障害者の変数が関与した。聴覚障害の親に対しては養育への早期支援，小児期のCODAに対しては，通訳負担の軽減と心理的ケアおよび親子の円滑な会話成立の支援が必要であり，当事者組織や関係する専門家による的確な助言や支援体制の整備が喫緊の課題であると示唆された。

キーワード

聴覚障害の親，聴覚障害者，健聴児，CODA，通訳役割

はじめに

聴覚障害者の家庭で育てられる聴力正常児を，Children of Deaf Adults（CODA：コード）と呼ぶ（CODA International，<https://www.coda-international.org/>）。米国における聴覚障害者の人口調査（The Deaf Population of the United States, 1974）¹⁾では，聴覚障害の親から正常聴力の子どもが生まれる確率は，両親とも先天性ろう者で81.4%と報告されている。また，両親のうち片親が先天性ろう者で片親が後天性ろう者では84.8%，先天性ろう者と難聴者の組合せで84.4%，先天性ろう者と健聴者を含むと85.2%と報告されている。州ごとの調査では，ワシントン州の既婚のろう者の89.4%，ニューヨーク州では89.4%が聴力正常児を出生すると報告されている。

わが国では同様の人口統計の報告はないが，厚生労働省全国在宅障害児・者等実態調査²⁾によると，身体障害者手帳交付対象である20歳以上の聴覚・言語障害成人は342,000例と報告されている。そのうち養育年齢期（20～49歳）の聴覚障害者26,000例が子どもの養育役割をもつと仮定し，前述の米国での両親先天性ろう者におけるCODAの出生率（81.4%）を用いると，国内では21,000例程度のCODAが推定される。さらに，先天性ろう者と健聴者の親（出生率85.2%）を含むと，22,000例程度のCODAの存在が推定される。

近年では高度聴覚障害者が社会的な活動を行う際には，手話通訳者や要約筆記通訳者等の通訳派遣制度が整備され，音声や聴覚情報の保障が行われている。しかし，生活場面の全てに通訳者を派遣することは困難であり，聴覚障害者の家庭で子どもが聴力

正常の場合には、子どもが日常的な音声や音環境の情報支援の役割を担うことになる^{3)~5)}。

著者らは、先に、親への手話通訳に注目し、親が手話を用いる CODA に対して調査を行い、CODA は家庭で親の会話法である手話を獲得し、親に対して聴覚情報や会話を伝えたり、通訳の役割を担うことについて報告した⁶⁾。また、幼児期より通訳を担うなど親をケアすることから、親子の依存関係が逆転したり、過度に役割遂行の意識をもち、親からの心理的自立が遅れる傾向について指摘した⁷⁾。したがって、CODA の発達の観点では人格形成に及ぼす影響も看過できず⁸⁾、また聴覚障害の親では CODA の養育について支援の検討が必要と示唆された。

しかし、CODA の通訳役割の実態については、国内外において事例報告に留まり、支援の根拠として充分とはいえない。そこで本研究では、親が手話を用いる CODA を対象とし、青年期の通訳役割の実態を調査して、関連する要因を検討し、CODA の発達過程と聴覚障害者の家庭の養育に関する支援に資する資料を得ることを目的とした。

方 法

1. 対象と方法

聴覚障害の親をもつ健聴児者 (CODA) を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。調査は全国47都道府県の聴覚障害者団体を経由して協力を依頼し、web (REAS: Real Time Evaluation Assistance System, 放送大学) を用い、併せて5部ずつ計235部の質問紙を郵送して、対応が困難な場合に紙面媒

体からも回答可能とした。さらに、CODA 当事者組織へ依頼の他、機縁法により調査協力を依頼した。対象の条件として、年齢が13歳以上で、両親または片親に聴覚障害があり、日常会話に手話を用いる聴覚障害者の親をもつ子どもとした。

2. 質問項目

表1に質問項目と回答法を示した。通訳状況4項目、会話状況2項目、個人属性7項目の計13項目で構成した。質問紙文頭に、「現在 (13~23歳) 感じていることをお書きください。」と記し、青年期の通訳役割を尋ねた。通訳開始年齢項目のみ、小児期からの通訳状況を尋ねた。なお、24歳以上の CODA の対象者に対しては、後方視的方法 (retrospective 法) により青年期についての回答を求めた。

通訳場面項目は、著者らの CODA 25名に対する面接調査研究⁶⁾の叙述から抽出し、多肢選択とした。通訳頻度評価は「お父さんやお母さんの通訳をしたことがありますか。」(1. 全くない, 2. あまりない, 3. ときどきある, 4. すごくある), 会話成立度評価は「どれくらい親と会話ができると思いますか。」(1. 全く成立しない, 2. あまり成立しない, 3. だいたい成立する, 4. 問題なく成立する) と4肢択一とし、通訳開始年齢、通訳実施頻度 (週) については自由記述で回答を求めた。

聴覚障害学専門家8名を対象として、全質問項目について3段階評定 (採択可, 要検討, 採択不可) の内容妥当性について評価を依頼した結果、全項目について一致して採択可と評価を得た。

3. 統計的検討

通訳の状況 (通訳開始年齢、通訳頻度) と CODA

表1 質問項目と回答法

カテゴリー	項目	内容	回答法
通訳状況 (4項目)	通訳開始年齢	いくつのときから通訳をしてきましたか。	自由記述
	通訳実施頻度/週	1週間のうち、だいたい何日くらい通訳をしてきましたか。	自由記述
	通訳場面	どんなときに通訳をしてきましたか (電話、学校関係、親戚の集まり、病院、買い物、テレビ、その他)	多肢選択
	通訳頻度評価	お父さんやお母さんの通訳をしたことがありますか。	4肢択一
会話状況 (2項目)	会話法	親とどんな方法で会話をしますか。 (声 (口話)、手話、筆談、身振り、その他)	多肢選択
	会話成立度評価	どれくらい親と会話ができると思いますか。	4肢択一

と親との会話法（Ryan 法多重比較：JS-STAR），CODAの通訳頻度および会話成立度と関連する要因（スピアマンの順位相関係数）について統計学的に検討した。次いで，重回帰分析（ステップワイズ法）を用いて，CODAの通訳頻度および会話成立度を目的変数とし，有意な相関を認めた項目を説明変数に投入して，関連する要因の構造について検討した（Excel 統計）。

本研究は，筑波大学人間系研究倫理委員会の審査，承認を得て実施した。研究協力に対し，研究の目的と概要，倫理的配慮および自由意思による協力と同意の随時撤回について文書を用いて説明し同意を得て実施した。

結 果

1. 対象者

聴覚障害の親をもつ健聴児者（以下，CODA）104例（男性39例，女性65例）より回答を得た（表2）。調査の回答は，親側の聴覚障害者団体から52件（回収率22.1%），CODAの当事者団体，機縁法等52件であり，質問紙調査57件，web調査47件であった。

2. CODAの親への通訳の実態

表3に，親への通訳状況について示した。通訳を

表2 個人属性

n = 104			
属性		n	%
性別	男性/女性	39/65	37.5/62.5
年齢	平均	26.0 ± 4.1歳	
	1) 13～19歳	24	23.1
	2) 20～29歳	32	30.8
	3) 30～39歳	25	24.0
	4) 40歳以上	23	22.1
親：聴覚障害	両親/片親	82/22	78.8/21.2
父：最終学歴	ろう学校	66	63.5
	高等学校	6	5.8
	大学等	14	13.5
	未記入	18	17.3
母：最終学歴	ろう学校	65	62.5
	高等学校	3	2.9
	大学等	14	13.5
	未記入	22	21.2

開始した年齢は，平均6.48歳 ± 3.23であり，5～6歳が40例（38.5%）と多く，次いで4歳以下の幼児の24例（23.1%）であり，就学前の幼児期からの開始は計61.6%と過半数であった。通訳実施は，週6～7日が42例（36.5%）と多かった（ $p < .05$ ）。

表4に，通訳場面状況を示した。98例（94.2%）が，家庭内会話・地域・外出時会話などの日常会話場面（161件）を挙げていた。次いで，親の聴覚情報への対応141件（85例/81.7%）で，電話対応やテレビなどの情報の通訳であった。また，聴覚障害の親が健聴者と交渉する際の通訳61件（57例/54.8%）があり，病院や銀行，生命保険担当者と親の代理として交渉する場面などが挙げられた。学校でのCODA自身や同胞についての教師との面談の際の親への通訳が56件（50/48.1%）挙げられ，CODAへの心理的負担を伴う多様な場面での通訳の実態が示された。

3. 会話方法

表5に，親との会話方法について示した（複数回答）。手話法が92例（88.5%）と多く，聴覚口話法が74例（71.2%）であった。一方で身振り71例

表3 通訳の実施

n = 104				
	<i>n</i>	%	小計	統計値
通訳開始年齢	平均6.48±3.23			
1 4歳以下	24	23.1	64	47.78* 1+2>3+4=5+6
2 5～6歳	40	38.5		
3 7～8歳	13	12.5	21	
4 9～10歳	9	8.7		
5 11～12歳	5	4.8	12	
6 13～15歳	7	6.7		
不明他	6	5.8		
通訳実施頻度/週	平均4.52±2.03			
1 6～7日	42	36.5	18.94* 1>2=3>4	
2 4～5日	19	22.1		
3 2～3日	25	24.0		
4 1日	13	12.5		
未記入	5	4.8		

* $P < .05$

Ryan 法による多重比較

表4 通訳場面（複数回答）

		n = 104		
カテゴリ	具体的場面	回答者数		件数
		n*	%	
I. 日常会話等		98	94.2	161
家庭内会話	来客・出前注文 新聞配達・きょうだい			(11)
地域で会話	親戚集まり・自治会・役所・買物・美容院・外食			(69)
外出時会話	旅行・ガソリンスタンド			(81)
II. 聴覚情報対応		85	81.7	141
電話代理	電話応対			(85)
マスコミ	テレビ・映画			(53)
環境音	自動車の近接			(3)
III. 親の代理交渉	病院・銀行・車購入 生命保険契約 親の転職時採用面接	57	54.8	61
IV. 学校関連	三者面談・家庭訪問 保護者会・授業参観	50 3	48.1 2.9	56 3
V. その他				
計				422

n* は当該カテゴリの回答者数, %の母数は104とした。

(): 下位項目件数

表5 会話方法（複数回答）

		方法	n	%	統計値
会話法	1	手話法	92	88.5	3.97 n.s.
	2	聴覚口話法	74	71.2	
	3	身振り	71	68.3	
	4	筆談他	71	68.3	
併用法	1	手話/聴覚口話 併用法	14	13.5	37.00* 1>2>3
		手話+聴覚口話+身振り+筆談他	48	46.2	
	2	主に手話法	15	14.4	
		手話のみ 手話+身振り+筆談他	15	14.4	
	3	主に聴覚口話法	4	3.8	
		聴覚口話のみ 聴覚口話+身振り+筆談他	8	7.7	

* $p < .05$, 上段に会話法（複数回答）を示し, 下段に併用について再分類して示した。

Ryan 法による多重比較

(68.3%), 筆談等が71例 (68.3%) と, 非定型的な方法が同程度に使用されていた。また, 手話と聴覚口話法の併用が62例 (59.7%) であり, CODA と親それぞれの主な会話法を併用している状況が示された。

表6に, 青年期の通訳頻度と, その会話成立につ

いての主観評価を示した。通訳頻度は, すごくある: 54例 (51.9%), とときどきある: 41例 (39.4%) の両方で91.3%を占めた。また, 健聴の親子であれば, 全ての音声を聴取して問題なく会話が成立することが前提であるが, CODA と親との会話は, 問題なく成立: 48例 (46.2%) に対して, だいたい成

立：47例（45.2％）と、不十分な点がありながらも成立しているとの回答は同率を示した。

4. 通訳頻度・会話成立度と関連する要因

表7に、通訳頻度および会話成立度（表6）と、関連する要因との相関係数（スピアマンの順位相関）を示した。なお、4要因についてダミー変数を用いた（[2. 親：聴覚障害] 1：両親, 0：片親, [3. 会話法] 1：手話法, 0：その他, [4. CODA性別] 1：男性, 0：女性, [6. 出生順] 1：長子, 0：その他）。その結果、青年期の通訳頻度評価について、通訳開始年齢（ $r=-0.28$ ）と、両親に聴覚障害がある（ $r=0.29$ ）に相関が高く、会話成立度評価は、両親に聴覚障害がある（ $r=0.22$ ）と、会話法に手話を用いる（ $r=0.20$ ）に相関が高かった。

表8に、通訳頻度評価と会話成立度評価を目的変

数とし、有意な相関を示した要因を説明変数に投入した重回帰分析の結果を示した。その結果、親への通訳頻度評価は、両親が聴覚障害であること（ $p<.01$ ）と通訳開始年齢が早期であること（ $p<.05$ ）の2要因が関与し、前者（標準偏回帰係数： $\beta=0.26$ ）が後者（ $\beta=0.19$ ）より関与が大きいと考えられた。会話成立度評価は、同様に両親が聴覚障害（ $\beta=0.22/p<.05$ ）の要因に関与を示した。

すなわち、CODAは小児期からの通訳開始により通訳頻度が高かったと評価し、両親の聴覚障害により、通訳頻度が高く会話が成立していると評価していた。なお、説明変数に多重共線性（マルチコ）は確認されていない（ $VIF>1.03$ ）。

考 察

本研究では、CODAによる聴覚障害の親への通訳役割の実態について、青年期以降のCODAに対する質問紙調査に基づいて検討した。本研究は、親が手話を用いるCODAを対象とし、通訳状況および親子の会話の実態と関連要因を検討して、聴覚障害成人が共生社会で生活を送る際の環境整備に向けて、CODAの発達および親の養育支援の在り方に関わる基礎的資料を得た。以下に、主要な点について考察した。

1. CODAの通訳役割の実態

本研究では、CODAの通訳役割は、日常会話での情報の伝達に加えて、親の健聴者との交渉場面の通訳などがあり、会話や判断について支援する状況が含まれることが示された。また、学校関連では、

表6 通訳頻度および会話成立度の主観評価

n = 104			
	n	%	統計値
通訳頻度			
1	54	51.9	75.31* 1 = 2 > 3 = 4
2	41	39.4	
3	8	7.7	
4	1	1.0	
会話成立度			
1	48	46.2	68.46* 1 = 2 > 3
2	47	45.2	
3	6	5.7	
4	3	2.9	

* $p<.05$ Ryan 法による多重比較

表7 通訳頻度・会話成立度評価と関連要因：相関係数

	変数	a	b	1	2	3	4	5	
a	通訳頻度評価	1-4	1						
b	会話成立度評価	1-4	.15	1					
1	通訳開始年齢	1-5	-.28**	.06	1				
2	親：聴覚障害（両親）	1/0	.29**	.22*	-.26**	1			
3	会話法（手話法）	1/0	.07	.20*	-.10	-.06	1		
4	性別	1/0	-.11	.10	.15	.00	.03	1	
5	きょうだい数	1-6	-.08	-.06	-.09	-.03	-.07	-.16	1
6	出生順	1/0	.09	-.07	-.21*	.02	-.08	.10	.10

* $p<.05$, ** $p<.01$ (Spearman 順位相関係数)

2, 3, 4, 6 : ダミー変数を用いた。

表8 通訳頻度・会話成立度評価と関連する要因：重回帰分析

目的変数：通訳頻度			
説明変数	偏回帰	標準偏回帰	F 値
親：聴覚障害（両親）	0.43	0.26	7.39**
通訳開始年齢	0.27	0.19	4.17*
* $p < .05$, ** $p < .01$			
目的変数：会話成立度			
説明変数	偏回帰	標準偏回帰	F 値
親：聴覚障害（両親）	0.39	0.22	34.29*
会話法（手話）	0.22	0.15	0.73
* $p < .05$			

教育指導を受ける児童の立場で、親と教師との面談会話内容を通訳するなどの児童にとって負担の多い状況もみられた。

Hadjikakou (2009) は、CODA が親の日常生活の多岐にわたり通訳を要請される事例を取り上げ、指摘した⁹⁾。CODA が担う通訳とは、親と第三者との間に立ち双方の言葉を訳して伝えることに加えて、場の雰囲気調整したり、親の内容理解が充分でない場合には理解に至るように解説するなどの機能も有する^{10)~12)}。さらに、日本語の読み書きに支障があれば、CODA は親の書いた文章の添削や代筆、学校などから届く文書の内容をわかりやすく説明する役割を担うこともある¹³⁾。したがって、CODA の通訳役割とは、音声の伝達と関連する支援を包括した総合的な行為といえる。

また、本研究では、CODA が就学前の幼児期から頻繁に通訳を担い、低年齢から通訳を開始するほど、通訳頻度が高いと回答していた。Bunde (1979) は、229名の CODA を対象に質問紙調査を行い、CODA は幼少期から親に期待される重要な通訳者であり世話役であることを指摘した¹⁴⁾。Preston (1995) もまた、成人した CODA へ後方視的な面接調査を行い、CODA が親の通訳者となり重い責任を負うことを指摘した¹⁵⁾。頻繁に交渉や判断までも要請される通訳実態からは、CODA が幼少期から通訳役割に負担感を抱く状況が推察された。一方で、CODA は、親の日常生活の多岐にわたり通訳役割が期待され、やりがいを持ち自信をつ

けるといった肯定的側面があることも想定できる。

2. CODA と聴覚障害のある親との会話法

本調査では、日常会話に手話を用いる親をもつ CODA を対象としたが、手話と同様に聴覚口話法の併用が多く、過半数を占めることが示された。Preston (1994) が、アメリカの18歳から80歳の CODA150名を対象に面接調査を行った結果でも、対象者 CODA150名の5分の1が親との会話法に手話を使用せず、聴覚口話法や身振り、筆談等を用いる状況が報告された¹⁵⁾。わが国では、澁谷 (2007) が、14~65歳の CODA40名を対象とした質問紙調査で、親との会話に手話法のみを使用する CODA は少数で、大半は手話のほかに聴覚口話法、身振り、声、筆談などの手段を併用することを報告しており¹⁶⁾、本研究結果と一致した。親は、手話を母語あるいは音声言語を獲得後に手話を用いており、健聴の CODA は生活上、主に音声言語を使用することで、日常の会話法に差異が生じ、会話法を共有することに課題が示された。

3. CODA と親の会話成立

本研究では、親と問題なく会話が成立すると回答した CODA は全体の約半数に留まり、親子でありながら十分な意思疎通に至らないという深刻な実態を浮き彫りにした。親は、CODA の音声言語の聴取に困難を伴い、CODA は日常では聴者の音声言語環境に帰属することから¹⁷⁾、手話の習得は容易ではなく、十分な会話成立が困難な状況にあった。

また、CODA は親の通訳役割を担えるほど手話が熟達している訳ではなかった。本研究では、ろう学校を最終学歴とする親が半数以上であるが、通常高校や大学等卒業 (22%) した親では、聴覚口話法で CODA と会話が成立する状況も推察できる。CODA への教育的配慮から親が聴覚口話法を用いる場合もあり、会話成立の改善には、親側の会話法も考慮して、固有の会話法の習熟について支援が必要と考える。

本研究では、両親が聴覚障害である要因は会話成立に有意に関与した。すなわち同家庭では、早期から手話による養育過程で会話法が習熟したことが推測される。一方で、同家庭では、CODA は家庭内の通訳役割を一手に引き受けて、責任の重い立場に

置かれ負担感が高まる状況になることも想定できる。

なお、親子の会話成立レベルが低い場合では、CODAは、親の話しが理解できないことより、親に自身の気持ちを伝えられない点に会話の不充足感を抱き、自分に十分な手話能力がないと自責の念をもつ事例が報告されている¹⁸⁾。Ginger (2013) は、CODA12名に家庭での言語使用に関する面接調査を行い、親は音声言語の十分な習得が難しいことから、結局、CODAが手話を習得しなければならず、CODAの方が親よりも大きな責任を負わなければならないことを指摘した¹⁹⁾。親子の会話成立レベルは、CODAの親への感情と関連し²⁰⁾、会話成立が低い場合にはCODAが責任を負うことが指摘され、親子の会話成立レベルは親子関係の重要な指標のひとつであることが示唆された。

4. CODA 支援について

近年、聴覚障害者への支援環境は整備されつつあるが、本研究では、なおCODAの通訳役割に残る実態と課題を示した。CODAは聴覚障害のある親の家族として、幼小児期から周囲や社会に通訳役割を期待され、親と共に育ってきた。手話による通訳は、聴覚音声や筆談と比べ、確実に聴覚障害のある親へ伝達できる手段であるが、幼少期のCODAが完全に手話を習得することは困難が少なくない。手話通訳は、音声をリアルタイムで手話に変換する高い技術を要し、幼少期のCODAにとっては容易ではなく、本研究結果からCODAの通訳役割は、多大な負担となっていることを示唆した。CODAの生育過程では、ピア支援も含めて、関係者の連携による通訳負担の軽減と心理的ケアの体制の必要性が示唆された。

さらに、本研究では、親子の円滑な会話成立に課題を示す状況が示された。親の養育の基盤として、CODAと共有し得る会話法について選択し学習する過程の支援が必要といえる。親子関係形成のためには、円滑な会話は必要不可欠であり、併せて、聴覚障害の親がCODAの養育に関わる情報を的確に入手できる体制が重要といえる。CODA親子の関係形成、手話等会話法の習得、通訳役割支援などについて、適切な助言ができる窓口や支援の体制の重要性について示唆された。

5. 本研究の限界

CODA当事者団体については、国内では1994年に結成され(J-CODA)約30名の会員が所属するものの組織化は全国的に進んでおらず、本調査対象として、当該組織の他、聴覚障害者団体の親の組織、機縁法などを経由してリクルートを行い、同意を得た場合に調査協力を依頼した。また、親側の聴覚障害など医学的情報等について子どものCODAは把握していないことから検討しておらず、今後の研究の継続が必要といえる。加えて、後方視的な調査回答により、結果に回答者の意向が反映している側面も否定はできない。しかし、悉皆調査ではないものの国内ではこれまでで最も多数のCODAの通訳に関する調査として実態と課題の一部を明らかにし、支援の在り方についての検討に資すると考えられ、今後の研究継続の必要性が示唆された。

ま と め

本研究では、聴覚障害の親をもつ健聴児(CODA)104名を対象に、聴覚障害の親への通訳役割の実態と関連する要因を検討した。

1. CODAは幼児期(平均6.48歳 $\pm$ 3.23)から親の通訳役割を担い、通訳は生活の多岐にわたり親の代理交渉を伴うなど、多大な負担となっていると示された。

2. 親との会話では、手話法が92例(88.5%)、聴覚口話法が74例(71.2%)であり、身振りや筆談等、過半数で非定型的な方法を併用した。会話が充分成立する例は半数(46.2%)と少なく、親子関係形成のために会話法の共有が不可欠といえる。

3. 親への通訳頻度は、両親が聴覚障害者で、通訳開始年齢が早い場合に高く、親子の会話は、両親が聴覚障害者の場合に成立する傾向が示された。

4. 小児期のCODAには、通訳負担の軽減と心理的ケアおよび親子の円滑な会話成立の支援の必要性が示唆された。聴覚障害の親には養育など当事者組織や関係する専門家による助言や支援の体制整備が喫緊の課題であると考えられた。

本論文に関連し、利益相反に該当する事項はない。なお、本研究はJSPS科研費(課題番号17K04197)の一部補助を受け、実施した。

本調査にご協力頂きました CODA 当事者組織および全国の聴覚障害者団体その他当事者の方々に、心より深謝いたします。

This survey of Children of Deaf Adults (CODA) was conducted to determine their roles in Interpretation for Deaf Parents and related factors.

Mami Nakatsu¹⁾, Eiko Hirota²⁾

¹⁾Disability Services Office, University of Tokyo

²⁾University of Tsukuba

A retrospective survey of 104 CODA was conducted to determine the actual status, related factors, and issues in the roles of CODA as interpreters for their parents. From their childhood (average: 6.48 years old), CODA are responsible for interpreting for their deaf parents, including proxy negotiations, instead of the parents, in various situations, representing the psychological burden of CODA. Of the CODA surveyed, 92 (88.5%) conducted conversation with their deaf parents using sign language and 74 (71.2%) using the Auditory/Oral Method, using gestures and writing together. The conversations were reported as being possible by only half of the surveyed CODA. Multiple regression analysis revealed that the frequency of interpreting was affected by two factors: both father and mother deaf and interpreting starting at a young age. Parent-child conversations were influenced by one factor, namely, of both the father and mother being deaf.

Early support for childcare is necessary for deaf parents, and to reduce the burden of interpreting, to provide psychological support and promote smooth conversation between parents and children for CODA, it is considered that the advice and support system of relevant experts is urgently needed.

文 献

- 1) Schein J, Delk M: The deaf population of the United States. Washington DC, pp.45, Gallaudet University Press, 1974
- 2) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課: 平成28年生活のしづらさなどに関する調査(全国在宅障害児・者等実態調査), 2018 https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu_chousa_c_h28.pdf (参照 2019-10-19)
- 3) Preston P: Mother Father Deaf: Living between Sound and Silence. Cambridge, Massachusetts, and London England, pp.11-37, Harvard University Press, 1994
- 4) Jones E G, Strom R, Daniels S: Evaluating the success of deaf parents. *Am Ann Deaf* **134**: 312-316, 1989
- 5) Frank H: Psychodynamic conflicts in hearing children of deaf parents. *Int J Psychoanal Psychother* **7**: 305-315, 1979
- 6) 中津真美, 廣田栄子: 聴覚障害者の親をもつ健聴の子ども (CODA) の通訳役割に関する親子の認識と変容. *音声言語医学* **53**: 229-235, 2012
- 7) 中津真美, 廣田栄子: 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) における親からの心理的自立時期長期化の要因. *音声言語医学* **55**: 130-136, 2014
- 8) 中津真美, 廣田栄子: 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) の通訳場面に抱く心理状態と変容. *Audiology Japan* **56**: 249-257, 2013
- 9) Hadjikakou K, Nikolaraizi M: The experiences of Cypriot hearing adults with deaf parents in family, school, and society. *Deaf Study Deaf Educ* **14**: 486-502, 2009
- 10) Buchino M A: Perceptions of the Oldest Hearing Child of Deaf Parents: On Interpreting, Communications, Feelings, and Role Reversal. *Am Ann Deaf* **138**: 40-45, 1993
- 11) Halbreich U: Influence of deaf-mute parents on the character of their offspring. *Acta Psychiatr Scand* **59**: 129-138, 1979
- 12) Arlow J A: Communication and character: a clinical study of a man raised by deaf-mute par-

- ents. *Psychoanal Study Child* **31**: 139-163, 1976
- 13) 澁谷智子: 文化的境界者としてのコーダ: 「ろう文化」と「聴文化」の間. *比較文学* **44**: 69-82, 2001
- 14) Bunde L: Deaf parents-hearing children: toward a greater understanding of the unique aspects, needs and problems relative to the communication factors caused by deafness. pp32-36, *Registry if interpreters for the Deaf*, Washington, D. C. 1979
- 15) Preston P: Mother Father Deaf: The heritage of difference. *Soc Sci Med* **40**: 1461-1467, 1995
- 16) 澁谷智子: 聞こえない親をもつ聞こえる人々の手話学習—フィールドワークにおけるコーダの語りから. *社会言語学* **7**: 43-55, 2007
- 17) Critchley E: Hearing children of deaf parents. *The Journal of Laryngology & Otology* **81**: 51-62, 1967
- 18) Preston P: Chameleon voices; Interpreting for deaf parents. *Soc Sci Med* **42**: 1681-1690, 1996
- 19) Ginger Pizer, Keith Walters, Richard P: “We Communicated That Way for a Reason”: Language Practices and Language Ideologies Among Hearing Adults Whose Parents Are Deaf. *Deaf Study Deaf Educ* **18**: 75-92, 2013
- 20) Goldenberg M: The relation between communication level and self-concept of deaf parents and their normal children. *Am Ann Deaf* **124**: 472-478, 1979

(2019年10月25日受稿 2020年1月8日受理)

別冊請求先: 〒113-8654

東京都文京区本郷7-3-1 学生支援
センター MF

東京大学バリアフリー支援室

中津真美

Mami Nakatsu

Disability Services Office, University
of Tokyo

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo,
113-8654, Japan